

2023.2.24 No418

おきがくろうニュース
沖縄学校事務労働組合



自らの要求は自らの手で！

カンパ送付先

郵便振替 02090-0-2239
沖縄学校事務労働組合

連絡先

e-mail:

okigakurou2017@gmail.com
HP:okigakurou.web.fc2.com

ドキュメンタリー映画「アリ地獄天国」を鑑賞して

1 映画を見ると得をする？

時代小説というジャンルで昭和の一時代を画した作家、池波正太郎（1923-1990）をご存じでしょうか。テレビドラマにもなった『鬼平犯科帳』や『剣客商売』など多くの小説作品はもちろん、食や人生論などを扱った味わい深いエッセイは、今でも人気を博しています。今回は映画を主題にした作品から「見ると得をする」その理由を見ていきましょう。

映画を観るといのは、何も特別に勉強しようと思って観に行くのじゃないでしょう。娯楽なんだからね。ぼくだって娯楽として映画を観ているわけだよ。その娯楽が、結果的に、自分の知らないさまざまな人生を知ることにつながって行く。それが映画の素晴らしいところだと思うんだな。

（池波正太郎『映画を見ると得をする』新潮文庫、1987年、p.200）

今回は、筆者が実際に「見て得をした」1本のドキュメンタリー映画をご紹介します。本県でもテレビCMが流れている実在の運送業者を相手に、ひとりの青年が労働組合活動を通して、会社からのパワハラなどの不法行為と闘った3年に及ぶ労働争議を捉えた「アリ地獄天国」（土屋トカチ監督、2019年）という作品です。

2 ドキュメンタリー映画「アリ地獄天国」

土屋トカチ監督は、出世作「フツの仕事をしたい」（2008年）で、低賃金と過酷な長時間労働（1か月で最長552時間！）に苦しむ長距離トラック運転手（セメント輸送）を取り上げ、著名な国外の受賞歴を持つ方です。

筆者は、待望の新作である「アリ地獄天国」の存在を以前にネットで知り、いつの日か本県での上映がかなうことを強く望み、監督にも直接メールで伝えていました。数年後、なんと2022年12月18日（日）

に1日限りの沖縄上映会が決定したと、監督本人からメールを受け取りました。場所は、本県のミニシアターを代表する「桜坂劇場」（那覇市）とコザを中心に地域全体を盛り上げる文化センターともなっている「シアタードーナツ」（沖縄市）の2館です。

実際に鑑賞した映画の感想は、怒りと悲しみが入り乱れ、最後に希望を見いだせるものとなりました。不当な長時間労働を強いられ、事故や破損を起こせば会社への弁済で借金漬けになる状況から、社員たちが自分たちの状況を「アリ地獄」と自嘲する実在の運送業者が舞台です。主人公である営業職の西村有さん（仮名、34歳）は、会社の方針に異議を唱え、個人加盟の労働組合（ユニオン）に加入したところから映画は急展開を見せます。その西村さんに会社はなんと「シュレッダー係」への配転を命じ、給料は半減、更には懲戒解雇にまで追い込まれます。ユニオンの抗議によって、解雇は撤回されたものの、復職後もシュレッダー係のまま、会社に反省の色は見られません。

シュレッダーのごみ捨てにゆく シュレッダーのごみは誰かが捨てねばならず（萩原慎一郎『歌集滑走路』角川書店、2017年、p.75）

学生時代に受けた過酷なイジメに苦しみ、不安定な非正規労働に従事した果てに、32歳の若さで自ら命を絶ったひとりの歌人による一首です。しかし、西村さんは労働組合に加入して闘うこと、ひいては生きることを選択します。3年もの長い闘いの日々、彼が最後に見た素晴らしい風景を、学校事務職員のみなさんに映画を通してぜひ追体験して欲しいと思いました。

3 労働組合とは何か？

『働きすぎに斃れて』などの著作があり、労使関係論・社会政策論が専門の熊沢誠氏（甲南大学名誉

教授)によれば、「労働組合の役割」とは次のようなものです。

労働組合の基本的な機能とは、階層上昇の競争に賭ける労働者個人を助けようとするものではなく、労働者がノンエリートの立場のまま、それでもまともな生活のできる収入、ほどほどの仕事量、人間としての尊厳、それらすべての基礎となる労働や職場についての発言権・決定参加権を、連帯と協同による団体交渉やストライキをもって闘いとうとする営みである。その営みがあれば労働者は、「ぱっとしない」仕事でも、経営者や上司に支配され操作されることなく、したがって強い脱出志向にとらわれることなく、そこでやってゆけるのである。

(熊沢誠「労働組合の役割」岩波書店編集部(編)『これからどうする—未来のつくり方』岩波書店、2013年、pp.301-302)

引用文中の「脱出志向」とは、「ここではない、どこかへ」と翻訳できるでしょうか。そして、その脱出志向への粗雑な批判として、「置かれた場所で咲きなさい」という上から目線の命令文が、同名本のベストセラーをキッカケにして、近年世間で流行しているようです。特に管理職などに座右の銘とする方々がいるようで、筆者が勤務した県立学校の校長にも、熱心な信奉者が実際にいました。

勤務条件や労働環境に不満があれば、その場からの「脱出」が一番お手軽な解決策であるわけです。しかし、扶養親族の存在や地理的・身体的制約によって、その脱出が不可能であれば、「そこでやってゆける」ために「まともな生活のできる」諸条件を求めて、「連帯と協同による団体交渉」を開始し、そして地道に継続していくしかありません。

労働組合とは、ある意味で「置かれた場所で咲く」ことを自ら選択した人々によって組織されています。当然ながらその選択は、管理職による命令でなされるものではなく、ましてや現状にひたすら耐え忍ぶことを意味しません。

これからも沖学労は、学校事務職員より良い勤務条件や快適な労働環境を求めて、楽しく活動していきます！

◎連載小説【第5話】「デスクワーカーズ(JWS)」の組合員との出会い(3)

(始、静華、香子：第一高校の事務職員。この3人を中心に組合加入・活動までの物語が展開していく。
博：第二高校の事務職員。「JWS」組合員)

ここは、県庁近くの喫茶店。先ほどまで開催されていた、県主催の事務職員研修会の帰りに寄ったのである。

向かいの席には、同じ事務職員である第二高校の博(ひろし)が座っていた。

「武から『うちの事務が、組合のことで話を聞きたいらしいから会ってこないか』と電話を受けたときはびっくりしたよ。実は、武は元組合員でね。今日は何なりと聞いて構わないよ」。ちなみに「武」は始が務める第一高校の事務長である。

「事務長って、『JWS』の組合員だったんですか！」

「まあね、いろいろあって、事務長になって組合を去ったんだよ。それよりも、たしか3名だと聞いていたが君一人かい？」

そうなのである。本当は3名で会うはずだったが、研修が終わると同時に

「ちょっとかおると買い物に行くから、まじめが話を聞いといて。まさか、女の子の買い物についてくるとは言わないわよね？」

「ええ、そんな話きいてませんよお」

さすが姫である。強引にかおるを連れて行ってしまったのである。

「はい、あと二人は急用で…すみません。今日は、私一人で話を聞かせて下さい。あ、始と言います」。

「そうか、残念だけど、『急用』ならしかたがないね。では、何を聞きたいのかな？」

「急用」に後ろめたさを感じながら、機関紙「JWS」を読んだこと、その中で「学校現場で法や条例に反する天引き業務が事務職員に押し付けていた事実」を、退職した教員が私に漏らしたこと。教頭に「先生方はいそがしいから」と仕事を押し付けられていること。自分も、教員との対応で何らかの上下関係を感じることはあるのだが、それは機関紙「JWS」が言う「職種差別」とは違う、言い過ぎなのではないか？ という思いを伝えた…。(第6話につづく)